

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月5日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03011

研究課題名(和文) 日本村落における一筆耕地呼称の流通範囲と歴史的変遷過程

研究課題名(英文) Historical Changes of Agricultural Plot Names and Social Groups in Japanese Villages

研究代表者

今里 悟之 (IMAZATO, Satoshi)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：90324730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本の農山漁村集落では一般に、生業上の知識として田畑の一枚ごとに通称が付けられており、これらも地名の一種と見なすことができる。このような微細な通称地名が、いつ誰によってどのような理由で名付けられ、どのような地域的範囲の人々に共有され、いつどのような理由で変化してきたのかについて、長崎県の平戸島を事例として研究を行った。平戸島では宗教が地域社会の成り立ちにとって特に重要であり、この宗教を基準に4つの地域に大別したうえで、それぞれの地域から事例集落をいくつか選定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の意義は、結果的には主に以下の4つである。(1)比較的小規模な地域の内部を区分して典型的に捉える地誌学の一つの方法を提示したこと、(2)従来不明の点が多かったキリシタン組織の編成原理とその規定条件の一端を明らかにしたこと、(3)典型的に把握した集落空間構成とその変化を把握する視点として歴史地理学の景観史との接点を見出したこと、(4)田畑一筆ごとの通称地名という民俗語彙の変化と継承の把握を通じて、農村の人々の生活や生業のあり方、さらには人間一般の空間認知のあり方の一端を解明したことである。

研究成果の概要(英文)：Japanese people in rural areas have maintained folk plot names as a type of agricultural knowledge and daily vocabulary. This study, based on Hirado Island's villages in Nagasaki Prefecture, clarifies which persons and social groups have shared the names for tiny plots, as well as how these names have been passed down and changed from their earlier forms through several decades up to the present.

研究分野：人文地理学

キーワード：通称地名 社会集団 信仰組織 農山漁村 長崎県平戸島

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、日本の農山漁村において田畑一筆ごとに所有者や耕作者によって名付けられてきた通称地名について、命名の空間単位や原理を解明しようとしてきた。このような通称地名は、それを名付けて利用してきた人々の空間認識の手掛かりとなり得るという点からも重要である。このような課題については、人文地理学、あるいはその隣接分野（民俗学・社会言語学など）においても、これまで体系的に検討されてこなかった。報告者は、このような極小の通称地名を学術的に概念化するために、筆名（ふでな）という統一的な仮称を設定して研究を進めてきた。

ところが、このような研究の過程で、断片的な調査から新たに2つの問題が浮かび上がってきた。第1は、筆名の流通範囲の問題である。筆名は基本的には1つの世帯内でのみ使用されるものではあるが、ある世帯の農作業を手伝う別の世帯や、田畑の耕作をある世帯から引き継いだ別の世帯は、その筆名の一部を認知し使用している場合があるらしいことがわかってきた。すなわち、筆名は常にある1つの世帯内のみで使用されるとは限らない、ということである。第2は、歴史的な変遷過程の問題である。筆名は、土地区画の大幅な改変が行われた際、あるいは親から子へと所有権や耕作権が引き継がれた際など、ある節目ごとに、その呼称が変化して行く場合も認められることもわかってきた。

### 2. 研究の目的

以上のような状況を受けて、本研究課題全体の当初の目的を、日本の農山漁村集落において田畑一筆ごとに付された通称地名について、その流通範囲と歴史的変遷過程を明らかにすることと設定した。しかしながら、研究の実施過程において、このような流通範囲を考える場合、それぞれの集落における基礎的な社会集団が展開する地域的範囲、あるいはその特徴や性質をまず見極める必要があると判断し、特にこの点に研究の重点を置くことになった。

### 3. 研究の方法

長崎県の平戸島を事例対象地域に設定し、全体の研究課題をさらに4つに細分して実施した。それぞれの課題について、平戸島の全ての農山漁村集落またはいくつかの事例集落を選定し、住民への聞き取り、地元の方の非公式文書、各種の公刊文献、土地台帳、地籍図、景観観察、地形図、空中写真などを資料として研究を実施した。

平戸島の多くの集落においては、在来宗教（神道・仏教）、旧キリシタン、カトリックという三者の各世帯が集落内部で非常に錯綜して分布しており、時には集落を超えて一つの社会集団を形成してきた。したがって、少なくともこの平戸島を対象とする場合、基礎的な社会集団の展開を検討する際には、これらの宗教的な紐帯を十分に考慮する必要があると考えた。

### 4. 研究成果

主な研究成果は、以下の4つである。

(1) まず、平戸島の農山漁村集落全体に関わる研究成果である。宗教分布によって区分した島内の4つの地域（北部、中部西岸、中部東岸、南部）がそれぞれ特有の地形的条件に概ね対応していること、それらの宗教分布と地形的条件が相俟って、宗教施設の配置や耕地の分布を含めた、各集落の空間構成にも影響を与えていることを明らかにした。

特にカトリックの分布パターン背景としては、地形的条件から派生した、社会的背景としての江戸期の藩牧の存在が重要であった。すなわち、半島部の溶岩台地などが平戸藩の藩牧として利用され、その利用がほぼあるいは完全に終わった江戸末期から明治初期にかけて以降、多数のカトリック（あるいは復活以前の潜伏キリシタン）が島外から移住していた。この状況は北部地域にもっぱら該当する。中部東岸地域の場合は、藩牧としては利用されなかったものの、やはり溶岩台地あるいは火山性丘陵地がカトリックの主な移住地であった。これに対して、このような地形的条件や社会的背景をほぼ欠いた中部西岸地域と南部地域では、カトリックが移住する余地はほとんどなかったと考えられる。

このような地形的条件は、4つの地域の個別の集落空間における宗教分布、すなわちその宗教を信仰する各戸の空間配置にも影響を与え、これらの地形的条件と宗教分布が相俟って、宗教景観要素をはじめとする集落内部の空間構成にも影響を与えてきた。集落空間構成としては、南部地域のものが最も基本的な類型である。すなわち、寺院・堂・三界万霊塔などの仏教的な景観要素を集村の中心に据え、海岸付近の山麓に神社を鎮座させ、様々な生業神や伝説関連の神仏を配置しながら、低地に集積する水田を含めて辻札で全体を囲む、という形態である。この基本的類型に類似しつつ、さらにキリシタン伝説地が加わるのが、中部西岸地域の集落空間である。隣接する集村あるいは疎塊村どうしの間は比較的なだらかな丘陵地で、田畑も丘陵地上まで広範に展開している。

他方で、南部地域の基本的類型に類似しながら、さらにカトリック的要素が加わるのが、中部東岸地域の集落空間である。その多くが島外から移住したカトリックは、主に台地面に散居し、教会が立地する場合には景観上の顕著な特徴となっている。宗教景観要素はもちろんであるが、集落形態・農業経営・行政区などの諸点から見ても、在来宗教戸とカトリック戸との対照性、あるいは両者の棲み分けは比較的明瞭である。さらに、このような中部東岸地域の集落空間に相対的に最も近いのが、北部地域の集落空間である。ただし、中部東岸地域に比べると、

いくつかの種類の宗教景観要素を欠くこともあり、在来宗教戸とカトリック戸との空間的・社会的な棲み分けはさほど強くない。以上が、第1の研究成果の概要である。

(2) 次に、上述の平戸島の4つの地域のうち、中部西岸地域の根獅子と春日、北部地域の油水という3つの旧キリシタン集落を事例として取り上げ、各集落のキリシタン組織の編成原理とそれを規定する諸条件について、隣接する生月島とも比較しつつ明らかにした。根獅子では集落内の4つの行政区とも連関した高度に体系的な信仰組織、春日では血縁原理に基づいた小規模な集団、油水では地縁原理に基づいた近隣組織的な集団が、それぞれのキリシタン組織の主な特徴であり、3つのスケールの重層的組織を特徴とする生月島ともまた異なっていることが明らかになった。

この結果に基づいて、宗教学や民俗学などを中心とした従来のキリシタン研究で指摘されてきた信仰組織の編成原理に関する説には、一定の修正が必要であることを指摘した。あわせて、キリシタン組織の編成原理の問題を考える場合、地形的条件、集落形態、人口規模、信仰組織以外の社会集団など、従来の社会地理学の分野で基本的視点となってきた諸条件を十分に考慮する必要性を示した。

(3) さらに、南部地域の在来集落(旧キリシタン集落でもカトリック集落でもないもの)である大志々伎を事例として、社会集団が展開する集落の空間構造について、歴史地理学の景観史の視点も取り入れながら、大正期から現在に至る変化を明らかにした。

大正期の空間構造については、まず空間全体の方位観として、南北軸と東西軸ともに、上手(カミ)と下手(シモ)という二項対立的な観念が想定される。小地域集団としての講の名称にも、この方位観が反映されていた。両軸ともに上手に位置づけられる区域のほぼ中央部には、社会的中心(寺堂)が立地し、逆に両軸双方の下手となる区域には、死や災厄に関わる場所(共同墓地、牛墓、虫送りの地点など)が集中していた。後者は観念的な「穢」に関わる区域であった。この区域から外部へ追放された災厄など、村落空間の外部で跋扈すると信じられていた諸々の災厄は、海岸部のものを含めた四方の災厄防御点(辻札)において侵入が阻止されていた。これに対して、特に「浄」の状態が重視される宗教的中心(神社)と水関連の祠堂(水神祠)は、東西軸の上手に位置していた。そして、浄水によって穢れを洗い流す精進川が、「浄」と「穢」の境界に位置していた。

次に、現在については、まず両軸の上手・下手という観念、あるいは「浄」「穢」の観念が相対的に弱まっている。もう一つの大きな変化は、山林化した耕地の激増、林野における生業活動の大幅な縮小、耕地への獣害の拡大などに伴って、村落空間を防御しようとする意識が、現在においてかえって強まっている点である。海岸から災厄が来るという意識は希薄になった一方で、宅地のすぐ背後まで迫ってきた山林から災厄が侵入するという危機感が増大し、それが三方の災厄防御点(辻札)の増加に反映していると考えられる。

以上のような空間構造(すなわち住民の空間認識)およびその変化の基礎にあるものとして、海岸線の位置や地形の高低、それに基づく河川の流下方向、耕地や林野などの土地利用の分布状況、集落内部の道路体系、当該地域全体の中心集落(城下や都市)の立地点、小地域集団の機能の状態などであることを指摘した。

(4) 最後に、中部東岸地域の宝亀集落と木場集落のいくつかのカトリック戸を対象に、筆名の歴史的変遷の問題に焦点を絞った。すなわち、生業知識かつ民俗語彙としての筆名は、現在までどの程度受け継がれ、どの程度変化してきたのかという問題である。筆名が変化し得る、あるいは継承され得る契機として、耕地の世代間継承や借入などの耕作主体の変化のほか、圃場整備や土地利用転換などの耕地の物的変化にも併せて着目した。

事例を3戸の農家に絞り、1975年と2010年の両時点(文献資料の利用が可能な事例戸ではさらに1940年の時点も加えた)における全ての耕作地に付けられた個別名称を網羅的に把握した上で、どの筆名が従来の呼称を継承したものであり、変化した場合には具体的にどのように変化したのかを明らかにした。その結果、1975年では85例中67例、2010年では47例中19例が、従来の名称を継承したものであることが判明した。

筆名が変化せずに継承される場合として、先代から相続した耕地について最も良く該当し、親戚を含む借入先の農家を使用していた筆名を継承した例もある。逆に、筆名が変化する実際の契機として、耕地の売買・貸借・譲渡、地割の改変や再編(圃場整備)、土地利用の転換などを挙げ得る。ただし、命名の基準に関しては、田畑の耕作を受け継いだ相手のそれに類似する場合が見られた。

本研究の結果からは、現在ある農家を使用している田畑一枚ごとの通称地名のうち、半数程度は少なくとも二世代あるいは三世代以上にわたって受け継がれてきたものであり、残りの半数程度は何らかの契機によって変化を経たものであること、また名称自体は継承されていない場合でも、命名の仕方は継承されていることがある、というおおよそその一般的知見を得ることができた。なお、この研究成果については、現在学術雑誌に投稿中である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2件)

今里 悟之,平戸島における宗教分布と集落空間構成の地形的条件,史淵,査読無, No.155, 2018, pp.103-134

IMAZATO, Satoshi, Spatial structures of Japanese Hidden Christian organization on Hirado Island: A comparative study of three villages and Ikitsuki Island. *Japanese Journal of Religious Studies*, 査読有, Vol.44, No.2, 2017, pp.255-279

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

今里 悟之,景観史と民俗地理学の接点 平戸島大志々伎集落を事例として,金田章裕編『景観史と歴史地理学』,吉川弘文館,2018, pp.300-322

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 該当なし

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者 該当なし

研究協力者氏名:

ローマ字氏名: